ロジエル

土曜日の今日、ロジエルは電車に乗って、となり町のカテリーナおばさんのところへ行く。

電車がホームに着くと、ロジエルは七人がけのロングシートの空いている席にすばやく座り、バッグからゲーム機とイヤフォンを取り出して、最近夢中になっているゲームを始めた。

（ゲーム機って便利だな。ゲームができるだけじゃない。電車の中でこうしていると、面どうなことに巻きこまれないですむんだ。何も見ないですむし、周りの人は何も聞こえていないと思ってくれる。）

電車は次の駅に着き、たくさんの人が乗ってきた。車内は立っている乗客でいっぱいになった。ゲーム機から目を少し前に移すと、つえと、それをにぎるおばあさんの手が見えた。ロジエルは、見てはいけないものを見てしまったかのように、すぐにゲーム機に目をもどした。

（よりによって、なんでぼくの前に立っているんだ。）

そのおばあさんのことが気になってゲームに集中できない。

（ぼくは、席が空いていたから座っただけだ。ぼくは十二才だけど、このおばあさんより若いってことでいえば、ほとんどの人がそうだ。それに、ぼくのように顔を下げて、ゲームをしたり、本を読んだりしている人もたくさんいる。）

ロジエルは、自分にそう言い聞かせ、あからさまに頭を深く下げて、ゲームに集中するようにした。

そのおばあさんは、二つ先の駅で電車を降りた。ロジエルは、少し目を上げて、それを確かめると、今まで息を止めていたかのように、ためていた息をふうっとはいた。

しばらくすると、話し声や笑い声が聞こえてきた。

（そうとう大きな声だな。それにしてもこの声は……。）

ロジエルはゲームの音のボリュームを下げた。

（ラズウェルじゃないか。あと、その他に二、三人いるな。いつもはおとなしいラズウェルなのに、よほど話に夢中になっているんだな。しかられても知らないぞ。）

そう思っていたちょうどその時、

「静かにしなさい。ここは電車の中だよ。」

と、しかる大人の男の人の声がひびいた。

ロジエルは顔を上げ、声がした方を見た。立っている乗客がゆれてできるすき間から、ラズウェルが顔を赤くしてうつむいているのが見えた。

（思ったとおりだ、電車の中での過ごし方ぐらいわきまえろよ。）

と、少し得意げな気持ちになり、ついつい笑みがこぼれた。そのしゅん間、右上からの視線を感じた。思わず見上げると、かなり年配の男の人と目が合った。ロジエルはあわててゲーム機に目をもどした。

（なんでぼくを見ているんだ。ぼくは静かにしているのに。あ、座りたいのかな。いや、もしかして……。）

ロジエルは、少し不安な気持ちになった。

（いや、ぐう然、ぼくを見ていたんだ、きっと……。）
ロジエルは、ゲームに集中しようとしたが、どうしても男の人の目が気になった。

駅に着くアナウンスが聞こえてきた。
（降りなきゃ……。）
ロジエルは、右を見ないようにして席を立ち、左のドアの方へ向かって乗客をかき分けていった。
「おさないで。」
女の人の声があがった。
（しかたないだろう、どいてくれないんだから。ぼくだっておしたいわけじゃない。）
ホームに降りると、すぐに電車は出発した。
ロジエルは、後ろをふり返らないようにして、ただ前だけを見て改札へと急いだ。ところが、改札に着いて、ジーンズの後ろのポケットに手を入れると、切ぷを入れておいた財布がない。
（落としたのかな。どうしよう。）
その時、後ろから背中をたたかれた。びっくりしてふり返ると、それは五、六才の女の子だった。
（なんだ、女の子か……。）
「お兄ちゃん、お財布を落としたよ。」
と、小さな手で持っていた財布を手わたした。

すると、となりにいた女の子のお母さんは、優しくロジエルに話しかけた。
「ポケットからはみ出していて、落ちちゃったのよ。気をつけなさいね。」
ロジエルがとつ然のことにうろたえている間に、その親子は改札から出ていってしまった。

ロジエルは改札を出て、おばさんの家へと急いだ。パン屋の角を右に曲がって、しばらく歩くとおばさんの家だ。ロジエルの頭の中では、ここに来るまでに起きたいろいろなことが、ぐるぐるとかけめぐっていた。つえをついたおばあさん、こちらを見ていた男の人、「おさないで。」と言った女の人、そして、あの女の子とお母さんのこと……。ロジエルは、何か責められているような気持ちでいっぱいになった。
「どこに行くの、ロジエル。」
後ろからとつ然呼びかけられ、ロジエルは、飛び上がるほどおどろいた。
「カテリーナおばさん。」
「あなたが、あの角を曲がって歩いてくるのをずっと見ていたのよ。考えごとをしていたようね。びっくりしたわ。おばさんに全く気づかないでそばを通り過ぎてしまうんだもの。考えるのもいいけれど、大切なものが見えていないようじゃだめね。」
カテリーナおばさんは、いつもの優しい目でロジエルを見つめながらほほえんでいた。
ロジエルは、どぎまぎしてほおを赤らめた。
「ごめんなさい。これからは気をつけるよ。」